

2019 年秋季大会・一般研究発表要旨

レヴィナスにおける存在の悪性 ——「イリヤ」とレヴィ＝ブリュールの「融即」——

小川 真未

エマニュエル・レヴィナスは、その初期の著作である『実存から実存者へ』（1947）において、そのタイトルが示しているように、存在から逃れ、存在者へと向かおうとしている。では、レヴィナスはなぜ存在から逃れようとしていたのか。それはレヴィナスが、存在に悪性を見出したからである。では、レヴィナスにとっての存在はなぜ悪なのか。レヴィナスが見出した存在の悪性とは一体何か。

こうした悪性の内実についてレヴィナスは詳しく述べることをしない。それゆえに、この存在を悪とするテーゼは「根拠がないもの」と批判されてもいる。しかし、このテーゼの直後に言及されている存在の恐怖を、この悪性の内実と取ることができるのではないか。このことを示すためには、今度は存在の恐怖を理解する必要がある。というのも、存在の恐怖とは何かということを理解することによって、初めてそれが実際に悪性と言えるものであるかどうかを検討することができるからである。しかし、その当の存在であるイリヤは、概念それ自体の複雑さによって理解しがたいものであり、それゆえに、このイリヤの恐怖が具体的にどのようなものであるか、そしてそれは本当に悪と言えるものであるかは明確には確定しがたいものとなっている。そこで、その理解に役に立つのが、レヴィナス自身によってその関連が示されているレヴィ＝ブリュールの「融即」という概念である。

この「融即」という概念は、その関連性にもかかわらず、レヴィナス研究においてあまり表立って取り上げられることがなかった。しかし、この概念には確かにイリヤに直結するような性質を見て取ることができる。そうした「融即」という概念のどのような点をレヴィナスが評価したかを見定めることができれば、レヴィナスがイリヤに付した恐怖の内実をより明確に理解し、そのイリヤの恐怖が実際に存在の悪性であるかどうかをはかるための手助けになると考えられる。したがって、本発表ではレヴィナスがイリヤの概念を示す際に用いるレヴィ＝ブリュールの「融即」と、それに関連する概念を用いて、レヴィナスがその概念のうちで注目していた点を確認することで、恐怖として描かれたイリヤが、実際に存在の悪性と言えるものかどうかを明らかにすることを目指す。

ジャン＝フランソワ・リオタールの貨幣哲学 ——『リビドー経済』を中心に

小泉 空

本発表は、フランスの哲学者、ジャン＝フランソワ・リオタール（1924－1998）の1974年の著作、『リビドー経済』を主要テキストとし、そこで彼が展開した貨幣哲学を明らかにしようとするものである。

先に『リビドー経済』以前のリオタールの思想変遷を概観しておこう。リオタールは、50年代にソルボンヌで哲学を学んだ後、アルジェリアの中等学校で教師の職に就いていた。54年、リオタールは、マルクス主義グループ『社会主義か野蛮か』に参加し、同名の雑誌にアルジェリア戦争についての論考を寄稿するようになった。そこでのリオタールの分析は、基本的にはマルクス主義的分析枠組みを保持しながら、アルジェリアの紛争を社会主義革命につなげようと画策するものであった。だが他方でリオタールは、古典的なマルクス主義の図式ではとらえきれない、アルジェリア戦争の「民族的な」側面にも注意を払っており、ソ連、フランス共産党が掲げる公式のマルクス主義からは距離をとっていた。

その後、66年にナンテール大学へと赴任したリオタールは、68年五月革命にコミットすることとなる。ここでリオタールは労働者を唯一の主体としない革命に触発されながら、階級規定からは独立した「欲望」を自らの政治哲学の賭け金とするようになった。

そして74年の『リビドー経済』において、リオタールは、この「欲望」を軸に、従来のマルクス主義的説明とは異なる資本主義像（革命像）を提示しようとするのである。この著作においてリオタールは、資本主義社会における欲望と貨幣の両義的な関係に着目している。一方で、貨幣は欲望を計量化し、交換－相殺することで、資本主義の拡大再生産を促進する役目を果たす。だがそれでもリオタールは、貨幣に計量されない、資本主義の「外部」にある欲望を想定することはない。ジェイムズ・ウィリアムズが指摘するように、リオタールはあくまで貨幣－欲望の解きほぐしがたいつながりをも認めた上で、資本主義「内部」からの革命の道を探るのである。そこでリオタールは、貨幣のもう一つの側面に注目を向けることになる。それは1929年の世界恐慌のような危機に明らかになるような、貨幣の「投機的な」側面である。リオタールはこの貨幣の投機性こそが、資本主義を内部から破裂させる可能性を持ったものだとして主張するのである。

本発表は、この貨幣の二面性を中心テーマとして、『リビドー経済』を思想的に解き明かすことを目標とする。

デカルトにおける「命題」としてのコギトと「認識」としてのコギト

田村 歩

デカルトは『方法序説』においてはじめて「私は思惟する、ゆえに私は存在する」という「哲学の第一原理」を措定したが、その後の著作や書簡における彼の複数の説明には、すでにピエール・ガッサンディといった当時の哲学者によって指摘されていたように、ある問題が潜んでいる。すなわち、コギトの真理性はいかなる前提にも依拠していないのか、という問題である——デカルトは、「自らが思惟する事物であるということに私たちが気づくという場合についていえば、それはいかなる三段論法によっても結論されることのない、ある種の第一の知見でありますし、また、誰かが「私は思惟する、ゆえに私は在る、いうなら私は存在する」と語る場合には、その者は、[...] それをあたかも自ずから知られたものとして、精神の単純な直観によって認知する」（「第二答弁」）と述べている一方で、「私は、「私は思惟する、ゆえに私は在る」という命題が、あらゆる命題のうちで、順序正しく哲学している人の誰もが会おう最初の最も確実な命題であるといったとき、だからといって、この命題に先立って、「思惟とは何か」、「存在とは何か」、「確実性とは何か」、また同様に「思惟するものが存在しないことはありえない」ということなどを知っておかなければならないことを否定はしなかった」（『哲学原理』）とも述べている。これまで多くの研究者たちが、これらの主張は相互に矛盾するものと考え、〈コギトは直観によって知られるのか推論によって知られるのか〉という論争を戦わせてきた。

本発表の目的は、この論争の原因について、徹底的に文献学的な仕方で論じることである。具体的にいえば、「私は思惟する、ゆえに私は存在する」というこの真理」（『方法序説』第四部）や「[...]」というこの認識」（『哲学原理』第一部第七項）、「[...]」というこの命題」（同第十項）や「[...]」というこの結論」（「ビュルマンとの対話」）というように、デカルトがコギトを指示する際に使用する各術語に焦点を当てるのである。というのも、デカルトは文脈によってコギトを指示する術語を注意深く使い分けているのであり、当該問題の論究にあたってその差異を看過することはできないと思われるからである。このような方針のもとで本研究は、コギトに関するデカルトの複数の記述を統合的に分類・解釈し直すことを目指す。

神秘家が機械になるとき ——ベルクソンにおける神秘経験と生命進化——

平賀 裕貴

本発表の目的は、神秘経験の只中にある神秘家について語る際にベルクソンが用いる〈機械〉という比喩を読み解くことにある。この読解を通して、〈機械〉という比喩と彼の生命進化の哲学との関連を指摘したい。この作業を経ることで、ベルクソンの神秘経験解釈を理解するための新たな視点を提示し、改めてベルクソンにとって神秘家をもつ意義を検討したい。

『道徳と宗教の二源泉』(*Les deux sources de la morale et de la religion*, 1932)で、ベルクソンは神秘家および神秘経験について集約的に論じる。なかでも、「キリスト教神秘主義のなかでもっとも教えに富むもの」とまで述べられながら仔細に吟味されるのが、十字架の聖ヨハネによって「暗夜」と名づけられた神秘経験である。ベルクソンはまず、神秘経験がいくつかの段階に秩序立てられている点や神秘家が陥る「不安」状態に注目する。こうした知見は、同時代の神秘主義研究、とりわけウィリアム・ジェイムズとアンリ・ドラクロワの研究に基づくものであり、いわば当時の標準的な視点から議論が組み立てられていると言える。

注目すべきは、こうした視点から出発しながらも、極めて特徴的な比喩が用いられている点である。神秘経験の最終段階を説明する箇所で、ベルクソンは〈機械〉という比喩を使用する。神との合一とそれに続く喪失の感情を経験する神秘家の姿を、ベルクソンは「組み立て途中」の「恐ろしいほど頑丈な鋼鉄の機械」になぞらえる。この〈機械〉は、検査を受け組み立てられるなかで、部品が外され、交換され、「欠損」と「苦痛」の感覚をいたるところに覚える、とベルクソンは述べる。神秘家を「組み立て途中」の〈機械〉に譬えるこの言葉は、ベルクソンの神秘主義を主題に据える研究において現在まで幾度も言及されているが、未だ解釈の定まったものとは言えない。

本発表では、この「組み立て途中」の「恐ろしいほど頑丈な鋼鉄の機械」という言葉がベルクソンの生命進化の哲学と関わっているという点を指摘するため、以下の手順を踏む。まず、ベルクソン哲学における〈機械〉に向けられた評価の変遷をたどるため、『創造的進化』(*L'évolution créatrice*, 1907)以前の〈機械〉に関わる思考を追う。そして『創造的進化』で眼球の進化を説明する際に用いられる「眼という機械」という表現を分析する。最後に『道徳と宗教の二源泉』で「暗夜」について論じられる箇所を扱い、ベルクソンにとって〈機械〉こそが神秘家の経験を十全に表す言葉であることを主張したい。これらの手順によって、ベルクソンにとって神秘家をもつ意義を示したい。

他者の痕跡を読むこと —ジャック・デリダにおける「翻訳」について

嶺村 慧

本発表は、ジャック・デリダにおける「翻訳」の概念について、精神分析との関連のなかで捉えることを企図するものである。『グラマトロジーについて』以降、現前の形而上学批判のために「精神分析の潜在能力を活用する、本来的に脱構築的な必要性を感じ」たというデリダは、たとえばフロイトについても多く論じていくようになる。そこでのデリダの関心は、差延や痕跡といった現前性の理論を逃れるものとして自らが見出した戦略素を、フロイトに内在する「痕跡とエクリチュールについての強力な省察」を批判的に用いて補完することにあつたと言えるだろう（『来たるべき世界のために』）。周知の通り初期のデリダの議論はエクリチュールをモデルとして構築されているが、そこには当然のことながら言語の問いが、そして「翻訳」の問いが賭けられていたはずである。であるとするならば、デリダにおける「翻訳」について考察するに際し、彼が自らのエクリチュール論においてフロイト及び関連テキストをいかに読み解いたのかということは正しく理解されなければならないだろう。本発表はそのためのささやかな試みである。ここで主に取り扱われることになるのは、1976年のテキスト「Fors」である。フランスの分析家ニコラ・アブラハムとマリア・トロークによる『狼男の言語標本』に付されたこの序文において、彼らの独創的なフロイト再解釈をうけるかたちでデリダも精神分析と「翻訳」の関係を論じているが、このテキストは「翻訳」が彼の思想においてもつ重要性を理解するために取り上げられなければならないものであるだろう。また、その後デリダの思想において比重を高める地下埋葬室や亡霊といった語が既に用いられていることも重要で、個別に論じられがちなこれらの語を「翻訳」という観点から整理することで、デリダの「翻訳」論理解のための一助としたい。

認識と生命の螺旋 ——ベルクソン『創造的進化』の哲学史観について

山内 翔太

ベルクソンは、彼の第三主著『創造的進化』第4章の後半において、古代ギリシアから彼のほぼ同時代までの哲学史を批判的に考察している。同章においては、無の实在性の否定、そして日常的な認識と科学的認識の双方を構成するとされる映画的思考への批判に続いて、いささか唐突にも、歴史的な時系列に沿った叙述が行われる。少なくともベルクソン自身が死後の公刊を許した主要著作において、彼が哲学史それ自体を考察の俎上に載せているのはこの箇所のみである。なるほど確かにベルクソンは、他の箇所でも哲学史上の諸理論を取り上げて批判検討はしている。しかしその取り上げ方は必ずしも思想史的な文脈に即しているとは言えず、同時代の科学理論や実験結果と並列されることから分かるように、決して歴史的考察を意図した形で行われているのではない。それゆえ『創造的進化』の中にあっても、第4章の哲学史論は異様に映る。そのためか管見の限り、この箇所について論じる研究は僅少である。

しかし、第4章は「思考の映画のメカニズムと機械論の錯覚—諸体系の歴史についての手短な考察、实在の生成と擬似進化論主義」と銘せられているように、「实在の生成」である持続および創造的進化を擁護しつつ、自らの理論が哲学史の流れの中から現れたものとして弁証するという極めて重要な章である。実際、第4章の前半における無の観念の批判や映画的思考の批判の展開として、ギリシア哲学の実体論やその翻案としての近世の形而上学への批判、或いはガリレイに由来する科学的な思考、カント哲学への批判に続き、スペンサー進化論への認識論的な批判が展開される。映画的思考は、实在であるところの生成ないし運動を、人間の行動の利害関心に従った知性によって固定的な性質、形態ないしは性質、行為などへと分割し、そこに空虚な生成一般の表象を加えることでそれらを以て生成ないし運動を再構成する、という人間の日常的な思考である。ベルクソンはここに機械論の本質を見出し、哲学史をその発展史と見做して批判する。注意すべきは、生命の利害関心に起因する思考が实在の認識に拘り替わり続けるこの思想史の結末が、ベルクソン自身の哲学、つまり实在を直観する哲学の出現において結ばれる点である。ここから、彼の哲学史論は、「認識論と生命論は相互に切り離し得ぬものだ我々には思える」という『創造的進化』全体のテーゼが、古代哲学からベルクソン哲学へ至る哲学の生成発展を解き明かすものとして読解できる。

本発表は、以上の観点から、『創造的進化』第4章における哲学史論を、認識論と生命論の循環から見た思考の歴史への批判として検討する試みである。